

# 日本語会話における「擬似コードスイッチング」の分析 Pseudo Code Switching in Japanese Conversation

白田 泰如<sup>†</sup>

Yasuyuki Usuda

<sup>†</sup> 国立国語研究所

National Institute for Japanese Language and Linguistics

usuda@ninjal.ac.jp

## 概要

本研究では、日本語の会話においてしばしば見られる、参加者が日本語標準語話者であるにもかかわらず、標準語以外のなんらかの方言、典型的には関西方言に属する語彙や表現を用いて発話するという現象について分析を行う。この現象については「ヴァーチャル方言」「方言コスプレ」といった呼称によって従来指摘がなされてきているが、その言語使用自体の経験的研究は十分でない。本研究ではそのため、実際に使用された会話のデータである『日本語日常会話コーパス』モニター公開版を使用し、会話分析の手法を用いて分析を行う。分析の結果、擬似CSは、字義的に提示されている行為とは異なる理解を促すためのメタメッセージを発話にもたせることを可能にしており、そのメタメッセージが場合によっては冗談であることへの理解や、譴責などの行為の持つリスクへの対処になっていることが明らかになった。

**キーワード:** 擬似コードスイッチング, 方言, 会話, 相互行為, 会話分析 (conversation analysis)

## 1. はじめに

日本語の会話を観察していると、しばしば参加者が日本語標準語話者であるにもかかわらず、標準語以外のなんらかの方言、典型的には関西方言に属する語彙や表現を用いて発話するという現象に遭遇することがある。具体的にはデータ1のようなものである。

**データ 1:** なんやねん

((Bの就職活動がうまくいっていないという話))

- |    |   |                      |
|----|---|----------------------|
| 1  | B | ただ今ほんとになんか [もう何もやりたく |
| 2  |   | な h[く h て h。         |
| 3  | A | [疲れたでしょ もう。          |
| 4→ | A | [なんやねんてはな [しやる。      |
| 5  | B | [もう。                 |
| 6  | A | 今。 =                 |
| 7  | B | =そ h う h             |

このような、参加者自身の母語ではない方言に会話の中でシフトすることを本研究では「擬似コードス

イッチング (以下擬似CS)」と呼ぶ。参加者は擬似CSをまったくランダムに行なっているのか、それとも何らかの秩序に基づいて、なんらかの事態を達成するためのふるまいとして行なっているのか。もしなんらかの事態を達成するために行なっているのだとすれば、それはどのような事態で、どのような秩序に基づいてなされているのか。それは擬似CSによって、なんらかの特定の行為を遂行することによって達成されるものなのか。本研究が明らかにすることを試みるのはこのような問題である。

## 2. 先行研究

コードスイッチング(CS)とは、「1つのコミュニケーションの場において、話し手のコード(使用言語)が、聞き手や状況、話題の変化などに応じて切り替わること [1, 230]」を指す。典型的には二言語(以上)話者が相手や場面に応じて複数の言語を使い分けを言うが、「日常生活の様々な場面に応じて標準語や俗語、方言を使い分けることもその一種 [1, 230]」とされる。ここでいう「方言」はおそらく話者自身が属する地域や社会階層のそれを指すと考えられるため、自らが属さない地域の方言を用いることである擬似CSは「擬似」とひとまず呼んでおくのが妥当であろう。また、「コード」は「個々の言語形式ではなくことばの体系全体 [2, 31]」を指すとされ、語彙を用いるだけでは、必ずしもCSの条件を満たさないと考えられる。のちに見るように、本研究におけるデータでは、関西方言において典型的に用いられると考えられるいくつかの語彙や定型句的な短文の使用が多く観察され、例えばアクセント型のスイッチは見られないことが多い。この点からもいわゆる典型的なバイリンガル集団におけるCSと同一視はできない。

このような日本語標準語話者によるなんらかの標準語以外の日本語方言の使用についての研究としては、上記の現象に類するものを「方言コスプレ」「ヴァーチャル方言」という術語で呼ぶ一連の研究がある [3, 4]。

「ヴァーチャル方言」とは、「特定の地域と結びついたリアルな生活の中で使われる素のことば」[3, vi]であるとされる「リアル方言」とは異なり、テレビドラマや小説、インターネットなどの「多様なコンテンツ類に現れる」「なんらかの水準において編集・加工を経て再提示されたもの」(vi)を指す。また「『ヴァーチャル方言』のなかには、方言の根幹であるはずの『特定の土地との結びつき』から解き放たれた用法を持つもの」(vii)として、発話者が生まれ育った地域とは無関係に、時に「単なるキブンの切り替えツールとして」(viii)方言的な言語使用を行うことを「方言コスプレ」と呼んでいる。「関西人でもないのに、『なんでやねん』とつつこんだり、土佐人でもないのに『行くぜよ!』と『龍馬語』でスカッと言い切ったりする、そのふるまい」(viii)を端的な例として挙げている。

田中はこうした方言的な言語使用と、全国方言意識調査から明らかになった「方言ステレオタイプ」(98-111)との結びつきを指摘し、さらにそれがテレビドラマ、とりわけ「NHK連続テレビ小説」や「NHK大河ドラマ」といった方言的なセリフを積極的に用いるドラマによって形成されていると論じている(114-127)。方言ステレオタイプは、そうしたドラマでの起用の多い東北、関西、九州などの地域で強く見られるほか、高知、鹿児島のような典型的なキャラクターの存在が指摘できる地域にも強いとされる。

一方で、これらの議論はある方言についてのステレオタイプの抽出を行う調査や、テレビドラマへの露出度との関連を分析するなどの手法に依っている。言語使用自体の詳細な分析は主としてテレビドラマなどのマスメディア資料に基づいて行われており[5]、とりわけ、本研究で扱う擬似CSと関連が強いと考えられる、「単なるキブンの切り替えツールとして」の用法については経験的研究が十分ではない。

本研究ではこのような現状を踏まえて、実際に使用された会話のデータを用いて、人々が方言的な言語使用をどのように行っているかについての経験的研究を試みる。

### 3. データと方法論

本研究で扱うデータは、国立国語研究所において構築が進められている『日本語日常会話コーパス(CEJC)』モニター公開版[6]である。CEJCは日常生活における会話の多様性をできるだけ反映し、さまざまな研究に利用可能な形で提供するため、音声および映像と文字起こしテキストを利用可能な形で提供するほか、以下のような特徴を備えるよう設計されて

いる。

- **大規模**：200時間分の会話データ（完成時、モニター公開版は50時間）
- **代表性**：年齢・性別・属性・会話の種類の高平衡性を考慮
- **検索性**：形態論情報（品詞、文中の位置、発話時間など）

また、会話自体の音声・映像データとその形態論情報だけでなく、居住地や出身地、年齢層などの周辺情報もある程度利用可能である。本研究では、研究の目的に鑑み、『日本語地図<sup>1</sup>』を参考に、話されている言葉が西日本方言的特徴を多く持つと考えられる地域への居住歴のある参加者が参加している会話を除外した。具体的には、富山県・岐阜県・愛知県以西の地域に居住経験のある参加者を含む会話は本研究の対象にしていない。

上記の自然会話データについて、会話分析 conversation analysis[7, 8]の方法論にもとづく分析を行う。会話分析とは、「人が日常生活の中で従事する多種多様な実践的諸活動——会話、会議、診察、面接、ゲーム、授業、接客等々——を構成する出来事や人びとの振る舞いが、いかにしてその場で常識的に合理的な理解可能性を備えるものとして成立しているか、この秩序を産出するための社会成員の「方法」[9]を、発話をはじめとする相互行為中の振る舞いの観察を通じて明らかにする」方法論である[10]。我々はやりとりを行いながら日常のさまざまな活動を行なっている。そうした活動の中のやりとりに用いられることばや身振りなどのふるまいは、すべてがそうではないにせよ、その活動を構成するひとつひとつの行為や活動全体を成り立たせるための参加者の指し手になっているものを含んでいる。会話分析が採用する分析方針は、どのようにしてそうしたふるまいが行為を構成する指し手になっているのかを明らかにすることである。

### 4. 分析

以下では擬似CSが観察される会話断片をいくつかみていく。以下に示す会話断片をみる限り、擬似CSは多様な連鎖環境において、多様な行為に埋め込まれて用いられており、相互の関連性に乏しい。

データ2は親しい友人同士のAとBの会話の一部である。Aは高校生などを対象にワークショップなどを行うNPO団体を主宰しており、その活動の一環として自身の出身高校の授業に参加して活動してい

<sup>1</sup>[https://www.ninjal.ac.jp/publication/catalogue/laj\\_map/](https://www.ninjal.ac.jp/publication/catalogue/laj_map/)

る。3行目にある「先生」とはその高校の先生である。データ2は、そのNPO団体のAの後輩が、先生を含めたグループチャットにおいて、先生からの連絡に返事をしないことを譴責したという出来事について語っている場面である。

**データ 2:** T010.013 (1)

- 1 B 友達ね [うん。  
2 A [そう。  
3 A とかだったらいいけど先生に対して。  
(1.0)  
4→ A なんでやと。  
5 B ああ。  
6→ A で返事をせえつつあったけど  
7 返事もし\*ないし。  
8 B \*((小さく2回頷く))  
(1.4)  
9 A で今回の最後の高校生の授業も (0.4)  
10 運営を(.)やりますよと。  
(0.5)  
11 A だけど(.)あの申し訳ない(の)でその  
(1.3)  
12 二週間前ぐらいかが(.)彼らの最後の授業。  
13 A もう彼ら四人に[授業を作らせて  
14 B [ああああ。  
15 A もうし-

Aは、自身が経験した腹立たしい出来事として、NPO団体の後輩がかつてとった行動についてBに語っている。→を付した擬似CSが出現するのは、その出来事を語る中で、くだんの後輩の行動に対して語り手自身がとった行動、およびその行動について語り手自身がとりえた仮想的な反応を提示する発話においてである(4行目, 6行目)。つまり、Aはここで、自らが行なった「譴責」という行為を再現する発話において擬似CSを用いている。

別の例も見てみたい。データ3は冒頭のデータ1の再掲である。Bは民間企業への就職活動と公務員試験を断続的に並行して行っており、そのことによって疲弊していることを語っている。A自身は就職活動はしていないが、それについて強く共感を示していることが見て取れる。

**データ 3:** K003.005

- 1 B ただ今ほんとになんか [もう何もやりたく  
2 な h[く hて h。  
3 A [疲れたでしょ もう。  
4→ A [なんやねんてはな [しやる。  
5 B [もう。  
6 A 今。=  
7 B =そ h う h

データ3において擬似CSが出現するのは、Bの自らの心情を開示する発話(1行目, 2行目)に対して、Aが共感 affiliation を示した(3行目)、さらにそのあと

の位置においてである。この位置における4行目は、3行目において行なった共感の提示をさらに強めるものとして理解できる。

データ2とデータ3において、擬似CSは異なる連鎖上の位置で、異なる行為において用いられている。一方でどちらの断片においても、語り手が経験した「嫌な出来事」についての、ある種の愚痴 complaint の語りがなされている。さらに、先に述べたように、データ2においてはその語られていることからの構成要素として、自らが行なった譴責を再現している。また、データ3の4行目においては、Aは自らが同種の経験を持っていないことについて、自分もそのことについてよく知っていることを前提にした発話の形式 [11, 12] を用いるという仕方でも共感を示している。これらの事例においては、上記のような一種のリスクを伴う行為を行う際に擬似CSが用いられているように見える。

さらに別の例を見てみたい。データ4では、A, B, Cそれぞれの共通の知人が話題になっている。当該の共通の知人は一時期連絡が取れなくてBが心配をしていたが、その人物にBが出先でばったり会ったという出来事が、この断片以前から語られている。2行目は連絡の取れなくなっていた当該の人物が発したときされる謝罪の発話の再現であり、続く5行目, 8行目および10行目は2行目に対するB自身の可能な発話の再現である。

**データ 4:** K001.003a

- 1 B (そこの) 玄関開けた途端に 玲奈:  
2 [アムソーリー [(って言ってさ)。  
(強調音調, 両手を広げるジェスチャー))  
3 C [ahahahahahahahaha  
4 A [ご:めんね 玲奈:。  
5→ B [そりや: [そりや: 当たり前やろ .ss hahahaha  
6 A [ahahahahehehe .hh huhuhu  
7 C [うん (0.3) うん うん うん。  
8→ B 当たり前 [前やろ。  
9 C [うん。  
10→ B [あんた生きてたんか [い みたいな。  
11 A [ahahahahehehe  
12 C [うん うん。  
13 B でも げん- 本人は元気で [そう。  
14 C [ふーん。

データ4において擬似CSが出現するのは、2行目の謝罪に対する可能な応答においてである。この発話はBが自分に起こった出来事において何が起こったのかを語り、それについて自分自身がなしえた反応を提示する位置である。いわばBはこの出来事をどう受け止めたのかということが表出されており、言語的には連絡が途絶えていたことを問題にするという行為が提

示されている。しかし一方で、この出来事の語り自体はあくまで笑い話として語られており、それは2行目の音調や身体動作や、それへの聴き手の反応からも理解可能である。

擬似CSが使われているのはまさにこのような位置である。つまりここでは、言語的には譴責という行為をした、あるいはしうるような事態だと捉えたことが表出されている一方で、それとは異なり、あくまで笑い話の一部として理解すべきであるということが示されうる発話になっている。この発話においては、擬似CSが、こうした「笑い話として理解すべきである」という一種のメタメッセージ[13]を担っている（コンテクスト化[14]している）のではないかと考えられる。ただし、このメタメッセージは、この話あるいはこの発話が笑い話であることを理解可能にするというよりは、当該発話がすでに笑い話として語られている出来事と齟齬をきたすものではないことが示されていると考えられる。

ここから遡って考えると、データ2およびデータ3では、データ4のように笑い話としての理解を促すメタメッセージを読み取ることは難しく、参加者も笑い話としては理解していないように見える。しかし、メタメッセージという観点から見ると、データ2においては譴責という行為が、それを再現的に語っている状況ではそれほど深刻に捉える必要がないということが表出されているのではないだろうか。データ2の4行目および6行目がそれぞれ直接引用であることから、いまこことは切り離された時空間における発話であることを重畳するメタメッセージが表出されていると考えられる。また、データ3においても、強い共感が字義的には「なんやねん」という、対象の人や事物に対する不満を訴えるような表現でなされていることから、不満の訴えという行為の形をとりつつ、それ自体はいまここで対処が必要となるような深刻さをもたないことが表出されているのではないだろうか。

先にデータ2およびデータ3について、なんらかのリスクのある行為に伴って擬似CSが用いられていると述べたが、これらの事例においては、表出されている行為が今ここで問題になるものではないというメタメッセージを伴うことで、例えば譴責や不満の訴えといった行為がもつある種の攻撃性のようなリスクへの対処になっているのではないか。

分析の最後にもう一つ断片に触れる。データ5はデータ2と同じ会話の続きの一部である。この断片においてAは具体的な出来事ではなくある種の理念のようなものについて話している。Aは、他者の評価や

自分の行動の結果といった事態が常に「マイナス」になると考えておくことで、実際にネガティブな結果になったとしても心理的に問題にはならず、ポジティブな結果をより喜ぶことができるという趣旨のことを話しており、Bはその理念について考察を交えながら同意している。

#### データ 5: T010.013 (2)

- |    |   |                        |
|----|---|------------------------|
| 1  | A | マイナスでいれば(0.3) 悲しむことはない |
| 2  |   | し。 =                   |
| 3→ | B | =くっそマイナスやな。            |
| 4  | A | ちょっとプラスがめっちゃプラスに見えるよ   |
| 5  |   | ってゆうの [が]。             |
| 6  | B | [その理由自体もさ なんか          |
| 7  |   | 体現してるよ。                |

3行目の擬似CSは、話題の理念が話されつつある時点で用いられている。Aが話している理念というのは、いわば自らの評価をあえて低くしておくというものであり、3行目はその理念に同意している。つまり自らを低く評価するという事に同意することになる。ここで注意したいのは、これまでみてきた擬似CSを含む発話の多くは直接引用の統語的形態をとっていたのに対して、3行目はそうではなく、今まさに話題になっているAの信念に同意する発話になっているということである。少なくともここで、擬似CSの用いられ方が、直接引用でありいまこの発話ではないことが、統語的手段に加えて発話の様態によっても示されることに限らないことがわかる。データ3の4行目においても、直接引用節に続く主節が擬似CSになっている。

もう少しここで話されている内容に踏み込むと、Aが話しているのは自らをあらかじめ低く評価することでものごとがうまくいくという話であり、それを肯定的に評価することにより、Bはいわば、Aが自らを低く評価していることを高く評価するという入り組んだ事態に入り込む。3行目でBは、Aの戦略の正しさを高く評価するために、前提となっている低い評価を受け入れるということをしていると考えられる。ただし、AがA自身を低く評価していることを受け入れるということと、Aを低く評価することは、当然ながら同じではない。Bはこの入り組んだ事態において、Aの低い自己評価を受け入れつつ、そのことを冗談めかし、Aを低く評価しているわけではないことを示すメタメッセージを、擬似CSによって表出しているように見える。

## 5. 考察

### 5.1 「方言コスプレ」と擬似CS

2. で言及した「方言コスプレ」とは、「関西人でもないのに、『なんでやねん』とつつこんだり、土佐人でもないのに『行くぜよ!』と『龍馬語』でスカッと言い切ったりする、そのふるまい」(viii) のこととされている [3]。こうした端的な例に比べると、本研究で扱った擬似CSは、いくらか類似したものもあるものの、極めて不明瞭に見える。例に挙げられているような「つつこむ」ことや「スカッと言い切」ることであるというような、スイッチしている方言と対応する行為が極めて同定しづらい。こうした点は、テレビドラマなどにおいて再現される、製作者の理解と再構成を経た言語使用と、現実の社会的相互行為に生身を晒してなされる言語使用との違いであるといえるだろう。

もちろん、「方言コスプレ」の観点を取り入れることで理解の方向性が見える例もある。データ6はデータ5とデータ2の間の時点での会話の一部である。データ2と同じくNPOが話題になっており、ここではAが、特定の技能のみによって構成員を評価すべきでないという理念のようなものについて話している。

#### データ 6: T010.013 (3)

- |    |   |                      |
|----|---|----------------------|
| 1  | A | なんかこれができない [んだから あいつ |
| 2  |   | [は (0.4) 使えないみたい [な。 |
| 3  | B | [否定しない。              |
| 4  | B | [はい はい。              |
| 5  | B | [ああ。 =               |
| 6  | A | =言い方悪いけどね。 =         |
| 7  | B | =わかるわかる。             |
| 8→ | A | は (0.2) あかんなみたいな。 =  |
| 9  | B | =存在を肯定だよな:。          |

擬似CSを含む8行目は、2行目までに話した内容についてBの同意が得られたあと、6行目でその「言い方」についての譲歩を付け加えたのち、2行目の位置から発話をやり直しているように聞くことができる。統語的に8行目は1行目の直後に接続する形になっている。つまり、6行目の譲歩を挟んで、2行目を言い換えたものが8行目であると理解できる。

この言い換えが、6行目の譲歩を踏まえたものであるとすると、2行目よりも「言い方」に配慮したものになっていると考える必要があるが、その配慮については明らかでないように思われる。「あかんな」というのは「使えない」よりは若干言葉を濁した言い方であるといえるかもしれないが、わざわざ言い換えてまで配慮を示しているといえるだろうか。

ここで「方言コスプレ」の考え方を取り入れて、関西方言のステレオタイプの使用やマスメディアにお

ける使われ方を考えてみる。関西方言はおそらく典型的なイメージの一つとして「お笑い芸人のことば」という理解のされかたを考えると考えられる。さらに、お笑い芸人がバラエティ番組のような状況設定でいわば「持論を語る」というコンテクストがありうる。例えば「ご意見番芸人増加にみる「芸人の第4のキャリアパス」とは」<sup>2</sup>にも挙げられている松本人志氏のようなイメージが関西方言のステレオタイプの一部をなしていると考えられるかもしれない。つまり、8行目は、わざわざやり直してまで言い換えることで、いわばバラエティ番組における「ご意見番芸人」の発言というコンテクストを輻輳することを試みたと考えうる。

この段階ではほとんど荒唐無稽な仮説にすぎない。方言に限らず、なんらかのステレオタイプのイメージの喚起による「キャラクター」の使用は、相互行為分析のトピックになりうる。それはある連鎖環境における可能なふるまいの選択肢がいくつか（細かい違いや、それこそ擬似CSを含めればほとんど無限に）あるなかで、そのどれを選ぶかという問題として捉えることが可能だからである。そうであるならば、相互行為分析の側に課される課題は、それがいかにして理解され、また理解されたことが公然化されているかを経験的に示しながら分析することである。本研究はその水準に至っていない。

### 5.2 メタメッセージはどう理解可能か

4. における分析には非常に重要な問題が残っている。それは、擬似CSがなんらかのメタメッセージを、字義通りの行為とは別に表出し、それによってその時々相互行為的課題に発話者が対処しているのだと考えたとき、その発話の受け手はそのメタメッセージを理解していることがどのように（分析者あるいはもとの発話者によって）理解可能になっているか、という問題である。もつとえば、そのようにメタメッセージを理解していることが相互行為の観察からわからないのだとしたら、そもそもそのメタメッセージは理解可能なのか（それゆえそんなものは存在するのか）ということに疑わなくてはならない。

これは本研究の現時点における解決すべき／可能な課題であると同時に、そもそも本研究が扱おうとした問題が相互行為研究としては不良設定問題であるということも端的に示している可能性もある。前者のよう

<sup>2</sup><https://jisin.jp/entertainment/entertainment-news/1616450/2020/7/31> 閲覧。

に考えるのは、これから類似の事例を集めて整理していったとき、たとえばメタメッセージの理解に失敗する事例や、なんらかの仕方での理解のマネジメントを行なっていると分析可能な事例が見つかる可能性はそれなりに高いためである。その一方で、本研究の分析に従えば、くだんのメタメッセージは首尾よく理解されたときには「何も起こらない」ような種類のものである。4. で扱った、例えば引用した行為がはらみうるリスクへの対処や、笑い話に直接引用を埋め込むことといったことは、失敗すればおそらくなんらかの齟齬という形でその不在が観察可能になるであろうが、成功したときにはごく自然なやりとりが進行するだけである。それゆえ懸念されるのは、例えば相互行為上のリスクであれば、それが志向されていることが相互行為の観察から明らかになるのかどうか問われなくてはならない。

## 謝辞

本研究は、国立国語研究所のプロジェクト「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」(プロジェクトリーダー・小磯花絵)による成果に基づいて行われた。また日本学術振興会科学研究費交付金若手研究「日常会話コーパスを用いた「課題」に基づく会話の分析: 定量・定性の両面から」(研究代表者: 白田泰如, 課題番号 20K13019) の助成を受けて行われた。

## 文献

- [1] 林 宅男, ed. (2008) 談話分析のアプローチ: 理論と実践, 東京: 研究社.
- [2] 真田 信治, ed. (2006) 社会言語学の展望, 東京: くろしお出版.
- [3] 田中 ゆかり (2011) 「方言コスプレ」の時代——ニセ関西弁から龍馬語まで, 東京: 岩波書店.
- [4] 田中 ゆかり (2016) 方言萌え!?——ヴァーチャル方言を読み解く, 岩波ジュニア新書, 東京: 岩波書店.
- [5] 太田 一郎 (2019) “メディアの中の方言: テレビドラマのコードスイッチング,” **鹿児島大学法文学部紀要人文科学論集**, vol. 86, pp. 21-38.
- [6] 小磯 花絵, 天谷 晴香, 居關 友里子, 白田 泰如, 柏野 和佳子, 川端 良子, 田中 弥生, 伝 康晴 and 西川 賢哉 (2020) “『日本語日常会話コーパス』モニター版の設計・評価・予備的分析,” **国立国語研究所論集**, vol. 18, pp. 17-33.
- [7] Harvey Sacks, Emanuel A. Schegloff and Gail Jefferson (1974) “A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation,” *Language*, vol. 50, no. 4, pp. 696-735.
- [8] Emanuel A. Schegloff (2007) *Sequence Organization in Interaction: A Primer in Conversation Analysis*, Cambridge: Cambridge University Press.
- [9] Harold Garfinkel (1967) *Studies in Ethnomethodology*, Englewood Cliffs, New Jersey: Prentice-Hall Inc.
- [10] 平本 毅 (2018) “会話分析の広がり,” in 会話分析の広がり, eds. 平本 毅, 横森 大輔, 増田 将伸, 戸江 哲理 and 城 綾実, 東京: ひつじ書房, pp. 1-33.
- [11] 神尾 昭雄 (1990) 情報のなわ張り理論—言語の機能的分析, 東京: 大修館書店.
- [12] 神尾 昭雄 (2002) 続・情報のなわ張り理論, 東京: 大修館書店.
- [13] Gregory Bateson and Jurgen Ruesch (1951) *Communication: the Social Matrix of Psychiatry*, London: Norton.
- [14] John J. Gumperz (1982) *Discourse Strategies*, Cambridge University Press.